



穩健主義者諸君、ロマックスを始めとする我が兄弟姉妹のみんな、友人たち、そして敵であるあなた方へ、

ここにいるみんなが友人だとは信じられないが、しかし誰一人として追い出したいとは思わない。今夜お話しすべきは、「黒人による反乱について、そして私たちはここからどこへ向かおうとしているのか、または次に何をすべきか？」ということだと私は考えている。僭越ながら私が思うに、それは投票か闘争かという問題に目を向けることによって理解できるだろう。

投票か闘争かということが何を意味するのかを説明しようとする前に、私自身について、はっきりとさせておきたいことがある。私は今なおイスラム教徒で、イスラム教こそが私の宗教だ。それが私の個人的な信仰だ。アダム・クレイトン・ポウエルはニューヨークにあるアビシニアン・バプティスト教会の代表を勤めるキリスト教伝道師であるが、しかし同時にこの国の黒人の権利獲得に挑み、それをもたらすための政治闘争に参加する人物でもある。マーティン・ルーサー・キング博士は下ってアトランタ、ジョージアのキリスト教伝道師で、この国の黒人の公民権のために闘うもう一つの組織を率いている。そして尊師ガラミソンは、あなた方も聞いたことがあるだろうが、もう一人のニューヨークのキリスト教伝道師で、分離教育を無くすための学校ボイコットに深く関わっていた。そして、私も伝道師で、キリスト教伝道師ではないが、しかしイスラム教の伝道師なのだ。私が信じているのは、全ての戦線においてあらゆる手段を用いて行動を起こすことだ。

私が今なおイスラム教徒であるからといって、今夜私がここへ来たのは私の宗教について議論するためではない。私がここへ来たのはあなた方に働きかけ改宗をさせるためではない。私がここへ来たのは我々の違いについて議論し意見を闘わせるためではない。なぜなら、今こそ我々は互いの相違点を脇へ沈めておいて、何よりもまず我々が同じ問題、共通の問題、バプティストであれ、メソジストであれ、イスラム教徒であれ、愛国者であれ、あなた方を非難的にしてしまうその問題を抱えているということに眼を向けるのが最善なのだと悟るときだからだ。あなた方が教育を受けているにしろ文盲であるにしろ、大通りに住んでいるにしろ路地に住んでいるにしろ、あなた方はちょうど私と同じように非難的になるだろう。我々はみな同じ船の上に乗っており、同じ相手から同じ非難を浴びせられるのだ。そしてその相手が偶然にも白人だったということなのだ。我々みながここで苦しんでいる。この国において、白人の手により政治的抑圧を受け、白人の手により経済的搾取を受け、白人の手により社会的汚名を着せられているのだ。

こんなことを言っているからといって、我々が反白人主義だということはない。そうではなく、我々は反搾取主義、反蔑視主義、反抑圧主義なのだ。白人たちが我々に敵対心を持って欲しくないのなら、抑圧と搾取と蔑視を止めるようにすればいい。ここにいる人々がキリスト教徒であれ、イスラム教徒であれ、ナショナリストであれ、不可知論者であれ、無神論者であれ、何よりもまず我々はその違いを忘れなければならない。我々の中にそういった違いがあるなら、クローゼ

ットの中へ仕舞っておこう。ひとたび前線に立てば、白人たちとの議論を終えるまでは余計なことは背負いこまないようにすべきだ。今は亡きケネディ大統領がフルシチョフと会合していくらかの小麦を取引できたのだから、我々にはその二人のそれよりも、もっと強い連帯が可能なはずだ。

実際取るべき手段が見当たらないのなら、投票か闘争かという選択肢を迫られるということを受け入れていただきたい。1964年の今において、これは我々の手にあるたった二つの選択肢なのだ。時間切れになりつつあるのではない、――もうすでに時間切れなのだ！

1964年はアメリカがかつて見た中でもっとも激動の一年になるおそれがある。激動の一年。それはなぜか？ あるいは政治の一年でもある。今年白人政治家たちがいわゆる黒人コミュニティへと戻ってきて、あなたや私の票を獲得しようとたわごとを言うだろう。今年白人詐欺師たちがまさあなたと私のコミュニティへと嘘まみれの約束を引っさげて戻ってきて、崩れ去るだけの希望を打ち建てる。巧みな言葉と、裏切りと、守る気もない嘘まみれの約束にまみれた希望だ。連中がこういう不満を育てるほど、それはたった一つのこと、つまり爆発へと導かれる。我々が兄弟であるロマックスには申し訳ないが、今のアメリカの状況における黒人たる我々は、もはや打たれた頬と反対のそれを差し出そうなどという気にはならない。

いかなる勝算も我々には残されていないなどと、誰にも言わせてはならない。徴兵でもされようものなら、あなたは韓国へ送られ、8億の中国人とにらみ合いをさせられることになる。そんなことをする度胸を向こうで発揮できるなら、今ここでそれを発揮すべきだ。向こうでの戦いについての勝算は、こちらでの戦いについての勝算ほど高くはない。それにここで戦うならば、少なくとも何のために戦うのかを見失うことはない。

私は政治家ではないし、政治を学んだことすらない。実際のところ、私はまともな教育を受けたことがないのだ。私は民主党支持者ではない。私は共和党支持者ではない。さらには、自分がアメリカ人であるとすら思えない。あなたや私がアメリカ人だというなら、何の問題も起きていないはずなのだ。真っ白いケツを渡米船から降ろした連中は、そのときすでにアメリカ人だった。ポーランド人の連中はそのときすでにアメリカ人だった。イタリア難民はそのときすでにアメリカ人だった。ヨーロッパから渡って来た、青い目をした連中は誰もがそのときすでにアメリカ人だったのだ。それなのにあなたや私は、ずっとこの国で生きてきたというのにアメリカ人とは見なされないのだ。

自分が思い違いをしているなどとは考えられない。食卓について他人が食事をしているのを見ながら、しかし私の皿にはなんの料理も乗せられていないというのに、自分が夕食を取っているなどとは言えない。食卓につくだけでは夕食を取ったことにはならない、皿の上にある料理を食べない限りは。ここアメリカにいただけでは、あなたはアメリカ人にはなれないのだ。ここアメリ

力で生まれたというだけでは、あなたはアメリカ人にはなれないのだ。いったいなぜ、アメリカで生まれた人間がアメリカ人になるために立法行為が必要になるのか。憲法の改正を要するようなことではない。ワシントンDCで公民権がただちに議事妨害の種になるような事態に直面する必然性もない。ポーランド連中をアメリカ人にするのに公民権法の可決など必要ないはずだ。

違う、私はアメリカ人ではない。私は2200万にも上る、アメリカ主義の犠牲になった黒人の一人だ。2200万にも上る、見せかけの偽善でしかない民主主義の犠牲になった黒人の一人だ。ここに私が立ってあなた方に語りかけているのは、アメリカ人としてでもなく、愛国者としてでもなく、国旗に敬礼する者としてでもなく、国旗を掲げる者としてでもない。違う、私はそういう人物ではない。私はアメリカというシステムの犠牲者として語りかけている。私は犠牲者の目を通してアメリカを見ている。私には普通のアメリカン・ドリームを見ることができない。私に見えているのは、悪夢としてのアメリカン・ドリームだ。

2200万人の犠牲者たちが目を覚ます。その目を開いて、かつては視界にあっただけの物をじっくりと見るようになる。彼らの政治参加への機が熟し、西海岸から東海岸まで新たな政治の潮流が押し寄せていることを悟るのだ。その潮流が見えたなら、僅差での選挙争いがある度に（人種の差が埋まりつつある）、それは再集計されなければならないはずだということを理解できるだろう。僅差の争いだったマサチューセッツで再集計を行えば、誰が知事になるはずだったのか明らかになるはずだ。ロードアイランド、ミネソタ、そしてこの国の多くの場所で、全く同じようなことが起きている。ケネディとニクソンの大統領選においてもまた同様だ。それは僅差で、始めから集計しなおすべきだった。これが何を意味しているかお分かりだろうか？ つまり、白人たちが均一に分布する一方で、黒人たちは特定の選挙区に押し込まれているということだ。そうすることで、誰がホワイトハウスの椅子に座り、誰が犬小屋に詰め込まれるのかの決定権を白人たちの手に委ねることになるのだ。

現政権をワシントンDCに据えたのは黒人たちの票だ。そう、あなたの一票、あなたの間抜けな一票、あなたの無知による一票、あなたが無駄にした一票が、ワシントンDCに政権を据えてしまうのだ。その政権は思い描いていたような法案を通すことができるように見えたかもしれないが、あなたのことは一番後回しにしつつ、議事進行を妨げてやり過ごしてしまう。それなのにあなたや私が選んだリーダーたちは厚かましくも拍手をしながら走りまわり、我々の要求の実現について大きな前進を果たしたと吹聴する。何と素晴らしい大統領を我々は選んだのだろう。テキサスにおいて善政を敷かないのなら、ワシントンDCで善政を敷くことなどできるはずもない。テキサスとはリンチが起きてしまう州なのだ。それはミシシッピと全く変わらない状態だ。テキサスではテキサス訛りの人間があなたをリンチして、ミシシッピではミシシッピ訛りの人間があなたをリンチする、それだけの違いでしかない。こういった黒人のリーダーたちは厚かましくもホワイトハウスに向いてテキサスの貧乏白人でしかない連中とコーヒーでも飲んでい。そしてひょっこり出てきたかと思えば、あなたや私に対して、自分たちは南部出身であり南部の人間

との交渉術を心得ているので、きっと良い結果をもたらしてあげられるなどと口走るのだ。いったいどんな理屈をこねているんだ？ 同じ南部出身なのだからとイーストランド（ミシシッピ出身の反公民権運動政治家）に大統領をやらしてみれば、きっとジョンソンよりも上手く交渉をしてくれるというなんて話になってしまう。

下院における議席配分は民主党が257議席、共和党が177議席であり、現政権はおよそ3分の2の議席を支配している。それなのに、いったいなぜあなたや私を救う何らかの法案を通わせることができないというのか？ 上院においては民主党が67議席、共和党はたった33議席にすぎない。これはどうしたことだろう、民主党は政府を支配しており、あなたこそがそのお膳立てをしてやった人物だということに。彼らが見返りにいったい何をしてくれたというのか？ 4年間を事務所で過ごし、そして今、公民権法への取り組みを上手くはぐらかしている。そして今、全てが終わってどこかへ行ってしまえば、椅子に腰を落ち着けて、ひと夏の間ずっと牛タン戦術を使った古典的的一大ペテンを行いあなたを弄ぶ。全員がグルになっているのだ。皆さんは、公民権についての議事妨害を先導するジョージア出身のリチャード・ラッセルという男によって彼らがグルになっていると考えたことはないだろうか。ジョンソンが大統領になったとき、彼がワシントンDCに戻って最初に呼び寄せたのが「ディッキー」（リチャードの愛称）だった。彼らがどれほど密接な関係にあるかお分かりいただけるだろう。彼はジョンソンの仲間で友達で相棒なのだ。そうやって彼らはあなたを古典的ペテンにかける。一方がその気もないのにあなたの味方であるかのように振る舞い、一方が強硬にあなたの要求に対立することで、約束を守らずに済むように仕組むのだ。

1964年、今こそ目を覚ます時だ。連中がそんな悪企みをしていることが分かったら、あなたのその塞がっていた目が開かれたことを私に伝えて欲しい。そして連中にも、あなたがもう一つの可能性を大きく切り開いたことを知らしめるのだ。それはつまり、投票か闘争かという可能性である。投票か闘争か、こういった表現を使うことを恐れるのならば、あなたはこの国から出て行ったほうがいい。あるいは、綿花畑に帰りたまえ。あるいは、路地に帰りたまえ。連中は黒人全員の票を獲得し、そうなってしまえば後は黒人に何の見返りも与えなかった。ワシントンに行った連中がしたことといえば、ひと握りの有力な黒人に大きな仕事を与えたことくらいだ。有力な黒人は仕事に困っておらず、大きな仕事など必要ないはずなのに。隠蔽工作、ひっかけ、裏切り、まやかし、結局はそういうことだ。私は共和党のために民主党を打ち倒そうなどと考えているのではないが、しかしすぐにそうする形にはなるだろう。我々が民主党を最上位に据えても、民主党は我々を最下位に据えるのだから。

そのやり口を見てみるといい。アメリカ議会を支配するために連中はどんな手管を使っているだろうか。私が「さて、いつになったら約束は果たされるのかな？」と訊けば、どんなごまかしが返ってくるだろう。連中はディキシークラットのせいにするだろう。ディキシークラットとは誰か？ それは民主党議員のことだ。変装した民主党議員以外の何者でもない。民主党議員

のトップならばディキシークラットのトップであるのと同じことであり、ディキシークラットは民主党の一部なのだ。民主党議員たちがディキシークラットを追いだそうとした試しはない。ディキシークラットが自ら離党したことはある、だが民主党議員たちの側から連中を追いだそうとすることはない。南部の分離主義者たちが北部の民主党議員たちをこき下ろしているのに、北部の民主党議員たちはディキシークラットをこき下ろさない、その背景に何があるのかを考えてみていただきたい。いや、そのやり口をひと目見てみるだけで結構だ。連中はペテン、それも政治的なペテンを続けているのであり、我々は騙されているその当人である。今こそ我々が目を覚まし、実際に起きていることを見つめ、理解しようと努め、そして真実を暴く時なのだ。

ワシントンDCのディキシークラットは政府を運営する鍵となっている委員会を支配している。ディキシークラットは年功序列で優位であるということだけで、その委員会を支配できているのだ。連中が長年議員でいられるのは、黒人が選挙から閉め出されている州から当選して来ているからだ。政府が民主主義を基盤としていないということがお分かりいただけるだろう。政府は人々の声を反映できていない。南部にいる黒人たちの半分は、投票することさえできないのだ。そのために、イーストランドのような奴がぬけぬけとワシントンに居座ってしまう。ワシントンにおいて重要なポストを占めている議員たちの半分は、違法であり違憲である選挙でそれを手にしている。

一週間前の木曜日、私はワシントンDCにいた。そこでは、連中が公民権の法案を俎上に乗せるか否かを議論していただのだ。上院議員が会議を行う部屋の後ろには大きなアメリカの地図があり、黒人の分布図が描かれていた。南部を見てみると、そこではほとんどが黒人が密集する州であり、議会において議員たちが立ち上がって議事妨害を行ったりその他の手管を駆使して黒人に投票させないようにしている州だった。惨めなことだ。だが、それはこれ以上我々を惨めな気分にはさせない。それを惨めに思うべきは白人の方なのだ。黒人たちがあとほんの少し目を覚ませば、今すぐにでも自分たちを締め上げる万力を目にし、自分たちを押し込むバッグを目にし、現実にとんなゲームに参加させられているのかを目にし、そして新たな戦略を練り上げるようになるだろう。

特定の地方や州での投票の権利を保証するよう改正された憲法に、アメリカの議員たちが違反しているという事実がある。そして憲法そのものが、その内部に人民の選挙権を侵害する州からの当選者を受け付けないメカニズムを持っている。新しい法律など必要ですらないはずだ。今議会にどんな議員も、人民の選挙権を侵害するような州および選挙区からやって来ている。そんな人間は議会からつまみ出されるべきだというのに。もしそうすれば、この国において本当に意味のある立法を行うのに障害になっているものを一つ、あなたが取り除いたことになる。だが実際にやってみれば、結局新しい法律なんかいらなかったということになるだろう。そうなれば、黒人が少数派ではなく多数派の地方と選挙区から黒人の声を代表する人物が当選し、資格のない議員たちに取って代わるからだ。

南部に住む黒人が満足な選挙権を持っていれば、ワシントンDCにいるディキシークラットの中枢、つまり民主党の中枢はその議席を失うだろう。民主党それ自体も力を失い、有力政党としては存在できなくなる。民主党がディキシークラットという派閥または要素を失えばそのまま民主党が大きな権力を失うことになり、南北戦争以来民主党が完璧な権力と権威を誇ってきた州で黒人に選挙権を与えることがいかに民主党の利益を奪うことになるかお分かりいただけるだろう。単細胞な奴でもなければ、もはやそんな政党に属する人間などいない。

もう一度言おう、私は反民主党ではないし、反共和党でもない、単純な反対主義者でいようなどとは思っていないのだ。ただ単に、彼らの誠意を問うているのであり、連中が守ろうともしない約束をしたことについて、その戦略がどんなものだったかを問うている。これからも民主党に権力を与え続けるなら、ディキシークラットにも権力を与え続けることになる。我が善良なる兄弟ロックスにもそれを否定することはできないのではないだろうか。民主党に投票することは、ディキシークラットに投票することと同じだ。だからこそ、この1964年というのは、我々が政治主体として成熟し、その一票がいったい何のためかということに悟るべき時なのだ。票を投じることで何が得られるはずなのかということに悟るのだ。我々がそういう悟りによって票を投じてこなかったからこそ、今のような状況に追い込まれ、闘争に駆り立てられているというわけだ。投票と闘争、我々はその両方に駆り立てられている。

北部では全く違ったことになっている。意味はどうあれ、そこにはゲリマンダーというシステムがあるのだ。黒人たちがある地域に密集するようになると、政治力を持ちすぎるからといって白人たちがそこにしゃしゃり出てきて選挙区の境界を変えてしまう。「なんでそんなにしつこく白人、白人とまくしたてるんだ？」と思われる方もいるかもしれないが、事実それをやっているのは白人という人種なのでしかたがない。黒人が境界を変えたなんていう例は聞いたことがない。黒人はその境界に触れられる範囲に近づけないようになっている。それをやっているのは白人という人種なのだ。普段の白人というのは、あなたに満面の笑みを見せ、親しみを込めて背中を叩いてくれる、友達と呼びたくなるような人種だ。彼らは友情を示してくれるかもしれない、しかし結局はあなたの友達ではないのだ。

私が懸命になってあなたに印象づけようとしているのは、本質的には次のようなことだ。我々がアメリカにおいて直面しているのは分離主義者の謀略ではなく、政府の謀略である。議事妨害をしているのは誰も皆、上院議員たちであり、政府そのものである。ワシントンDCにおいて議事妨害をしているのは誰も皆、下院議員たちであり、政府そのものである。あなたの目指す道に障害物を置いているのは、他でもない政府の一員である。あなたが外国まで出向いて死を賭して闘おうというその政府は、あなたから選挙権を奪い、雇用や起業のチャンスを奪い、きれいな家を手に入れるチャンスを奪い、まともな教育の機会を奪う、その政府と同じである。雇い主の所へ抗議に向かう必要はない、この国の黒人への抑圧と搾取と侮蔑について責めを負うべきは政府そ

のもの、アメリカの政府である。それを連中に対し、いきなりぶつけてやろうではないか。政府は黒人を完全に失望させてしまった。この民主主義とか言われている代物は黒人を完全に失望させてしまった。白人でリベラルとかいう連中はどいつもこいつも、完全に黒人を失望させてしまった。

さあ、これをどうやって打破していけばいいだろう？ まず、我々は友人を作る必要がある。新しい連帯を結ぶのだ。いかなる公民権運動においても、その解釈を新しくして、広げる必要がある。公民権というものを別の角度から見なければならない、内側から、そしてどのように外側から。黒人民族主義をその哲学とする我々にとっては、新たな解釈を与えることこそが公民権運動に参加する方法なのだ。古い解釈は我々を排除している。進入禁止というわけだ。だから我々は公民権運動に新しい解釈を与えよう、そこに足を踏み入れ、参加できるようにする、そういう解釈だ。ぐずぐず、こそこそ、へこへこ、といった態度で白人にこびる連中については、我々はもはやそういう態度で居続けることを容認してやるつもりはない。

もともところちらの持ち物だったはずなのに、それをくれてやるとか言う人間に感謝する義理などあるのか？ もともところちらの持ち物だったはずの部分だけをくれてやるとか言う人間に感謝する義理などあるのか？ そこには何の前進もない。与えられている物は、あなたがすでに手にして当然の物だったのだから。それは前進ではない。私は兄弟ロックスを、そして1954年のあの時を振り返るように意識を向けさせるというやり方をとても気に入っている。我々は1954年に自分たちがいた所にさえいない。我々は1954年から後退している。1954年のころより人種隔離はひどくなっている。1964年の今、1954年のころより人種間の敵対心は強くなり、人種間の憎悪は強くなり、人種間の暴力はエスカレートしている。どこが前進しているというのだろうか？

そして今、あなたは若い黒人たちが台頭してくるという状況を目にしている。彼らは「もう一方の頬を差し出さない」などという戯言など聞きたくもないと思っている。ジャクソンビルでは、十代の少年達が火炎瓶を投げていた。黒人は今までそんなことをしてこなかった。新たな一手が講じられようとしているのがあなたにもお分かりだろう。新たな考えが生まれている。新たな戦略が生まれている。今月は火炎瓶、来月は手榴弾、そして2ヵ月後には別の何かが投じられる。投票か闘争か、生か死か。この死はそれが応酬的であるということを唯一の特徴とする。「応酬的」という言葉で私が何を意味しようとしているかお分かりだろうか？ それは兄弟ロックスの言葉だ。私はそこからこの言葉を借りている。普段の私は有力者と関わらないので大げさな言葉を扱うことがない。私が関わるのは平凡な人々だ。あなたは多くの平凡な人々と仲間になり、有力者たちから多くのものを奪い取ることができるだろう。平凡な人々に失う物は何もなく、そこには得る物しかない。そしてすぐにでもあなたに伝えてくれるだろう。「タンゴを踊るには二人の人間が要るのさ、僕が手を差し伸べ、君がその手を取る」

黒人民族主義を標榜する黒人民族主義者は、公民権運動のあらゆる意味について新しい解釈をもたらしており、兄弟ロックスが示したように、機会の平等としてそれを掲げている。公民権運動が機会の平等を意味するなら、我々が公民権を求めることは正当化される。我々皆がやろうとしているのは、我々が投資を行うために資金を募ることだ。我々の母と父は汗と血を投資してきた。300と10年の間この国で働いてきたというのに、我々はびた一文その見返りを受け取っていない。びた一文たりともだ。あなたはこの辺をうろついている白人たちがこの国の豊かさについて語るのを容認しているが、しかしなぜこんなに早くこの国が豊かになったのかについて考え続けるだろう。この国を豊かにしたのは、あなたなのだ。

今この会場にいる周囲の人たちを見回してみしてほしい。彼らは貧しい。我々は皆、個人としては貧しい。我々が一週間働いて手にする金はほんのわずかだ。だがここにいる皆の金を集めれば、たくさんのカゴをいっぱいにするくらいになるだろう。大変な富だ。もしあなたがここにいる人々の賃金を一年間分集めることができるなら、金持ちになれるだろう。普通の金持ちよりももっと金持ちになれる。そんなふう考えたとき、アンクル・サムが金持ちになるために何を必要としていたかを考えてみていただきたい。その手で数えられるくらいではなく、何百万人もの黒人を使ったのだ。我々の母親と父親を使ったのだ。彼らの労働は8時間のシフトなどではなく、「暗くて周囲が見えないような」早朝から「暗くて周囲が見えないような」夜遅くまで働いたのに、その実りも得られず、白人を豊かにし、アンクル・サムを豊かにしてきた。これが我々の行なってきた投資であり、我々の行なってきた貢献であり、我々が流してきた血なのだ。

我々は無償で労働力を提供することだけではなく、自らの血を提供することもおこなってきた。連中が兵隊を求めていれば我々は真っ先に軍服に身を包んだ。白人が作り出したいかなる戦場にも、我々は屍を残してきた。今日アメリカの地に立つどんな人間よりもはるかに我々は犠牲をささげてきたのだ。どんな人間よりもはるかに貢献し、しかしはるかに少ない褒賞しか得て来なかった。公民権、黒人民族主義を標榜する我々がそれにより訴えているのはこういうことだ。「しかるべきものを今渡してもらおう。来年まで待つなどあり得ない。しかるべきものを昨日渡してもらおう、それでも遅いくらいだが」

ここでひとつ、あることを指摘しておこう。あなたが自分の手にすべきものを追い求めているのに、誰かがそれを手にする権利を奪い取ったとしたら、例外なくその人間は犯罪者だ。このことを確認してほしい。あなたの持ち物を手にしているなら、例外なく法律で保護された権利だと主張できるのだ。あなたの持ち物を奪おうと試みるなどということは、法律違反であり、誰がやろうともその人間は犯罪者だ。そしてこのことは最高裁の判決により示されている。人種隔離は法に悖る行為なのだ。

つまり人種隔離は法と対立する。つまり人種隔離は法を破っている。人種隔離主義者は犯罪者だ。連中に貼り付けるラベルはそれ以外にはない。あなたが人種隔離に反対するデモを行うという

のなら、法はあなたの側についている。最高裁はあなたの側についている。

さあ、いったい誰が法の適用に反対をしているというのだ？ 警察それ自体だ。警察犬をけしかけ警棒を振り回す。人種隔離に反対するデモをすればいつでも、それが教育における人種隔離であれ、住居における人種隔離であれ、その他あらゆるものにおける人種隔離であれ、法はあなたの側についており、あなたの行く道に立ちはだかる者が誰であれ、もはやそこに法の正当性はない。連中は法を破っているのであり、つまり法を体現してはいない。人種隔離に反対するデモを行えばいつでも、厚かましい連中は警察犬をあなたにけしかけてくる。その犬を殺せ、その連中も殺せ。はっきりとあなたに言うが、そんな犬は殺してしまえ。口を嚙むつもりなどない、もし連中が私を明日牢屋にぶち込んだら、その犬を殺せ。それをやるまでは手を止めるな。ここにいる白人たちがそんな行動を目の当たりにしたくないのなら、大人しく引き下がって市長のところへ行き、警察に犬どもを引っ込めろと命令するように言ってもらいたい。それこそがあなたのやらなければならないことだ。もしあなたがやらないのなら他の誰かがやるだけだが。

こういう態度を取れないのなら、あなたの幼い子どもが大きくなった時、あなたを見て「恥さらし」と思うだろう。妥協を拒む態度を取れないのなら、あえて外へ出て暴力に訴えろと言いはしない。しかしあなたが暴力にさらされることなどないと言い切れないのであれば、あなたも暴力を手放すべきではない。私に暴力を振るわない人間に対して私は暴力を振るわない。だが私に暴力を振るう人間がいれば、私は怒り狂ってその相手に何をしでかすか分からない。そして全ての黒人もこのように考えるべきなのだ。法に則り、合法的権利に則り、道徳的権利に則り、正義とともにあるならいつだって、自分の信じるもののために命を賭けるべきだ。だが犬死はいけない。死ぬなら敵と刺し違えるのだ。平等というのはそういうことだ。人種など関係なく、物事は平等でなければならない。

このくらいの領域になってくれば、我々には新たな友人、新たな連帯が必要になる。公民権運動をもっと高い水準、人権という水準まで広げる必要がある。公民権運動ということでもってやっている限り、あなたが自覚していようがまいが、あなたはアメリカ司法の手のひらの上に収まってしまふ。その闘争が公民権運動である限りは、外部からどんな人間がやって来てもあなたの声を代弁することはできない。公民権は、この国の内部の問題でしかないのだ。アフリカの兄弟、アジアの兄弟、ラテンアメリカの兄弟のみんなが我々の問題について意見を述べ、関わりを持つとしても、それがアメリカの国内問題だというならどうしようもない。それを公民権だとする限り、この問題はアメリカ司法の手のひらの上に収まってしまふ。

おかしいことだが、アメリカは独立宣言の中で基本的人権について定めているということが知られている。しかも人権問題を扱う委員会まで備えている。アフリカ、ハンガリー、アジア、ラテンアメリカなどで行われたあらゆる残虐行為が国連で議案に上っているというのに、なぜ黒人の問題が国連で議案に上らないのかとお思いではないだろうか。我々を欺く手管の一端である。こ

ういった年寄りの、ずるがしこい青い目の自由主義者は、あなたの友達のようになって、我々の側についているように見え、我々の闘争を支援しているようで、助言をくれる立場にあるようにしているが、決して人権については口にしない。あなたは公民権の木の皮を剥がすことにやっきになっているが、同じ敷地に人権の木があるなどとは思っていない。

公民権というものを人権の水準まで拡大していこうとするならば、この国の黒人問題を国連加盟諸国の眼前まで持っていくということが一つの方法になる。国連総会参加者の眼前に持っていくこともできる。アメリカ政府を世界法廷へと連行することができる。だが、それが可能になるのは人権という水準であればこそだ。それが公民権である限りは、あなたはアメリカ司法の傘下であり、アメリカの懐に収まってしまう。公民権の意味するところは、あなたがアメリカ政府に対してあなたを適切に扱って欲しいと乞うているということだ。だが人権とは、あなたが生まれつき持っているものだ。人権とは、神に与えられた権利なのだ。人権とは、この地球上にある全ての国々において認められているものなのだ。誰かがあなたの人権を侵害するなら、いかなる場合においてもそれは世界法廷において裁かれるはずなのだ。

アンクル・サムの手からは血が滴っている、この国の黒人の血が滴っている。彼こそはこの地球で一番の偽善者だ。忌憚なく言うが、厚かましくも自由な世界の指導者として振舞おうと考えている。自由な世界だと！そしてここにいるあなた方は「勝利を我らに」を歌っている。公民権運動を人権の水準まで拡大しよう。それを国連まで持ち込もう、そこではアフリカの兄弟たちが我々に肩入れしてくれる、そこではアジアの兄弟たちが我々に肩入れしてくれる、そこではラテンアメリカの兄弟たちが我々に肩入れしてくれる、そこでは8億人の中国人たちが座っており、我々に肩入れしようと待ち構えてくれている。

アンクル・サムの手がいかに血で汚れているのかを世界に知らしめよう。ここで行われている偽善について世界に知らしめよう。投票か闘争か、そこに運命を委ねよう。投票か闘争か、それは避けられない運命なのだとアンクル・サムに知らしめよう。

あなたが自分の問題をワシントンDCへ持って行くということはつまり、あなたがそれを犯罪者の所へ持って行くということだ、そこではその犯罪者こそが責任者だというのに。狼から逃げて狐のところへ走っていくようなものだ。どいつもこいつもグルになっている。連中の誰もが政治的詭弁を弄し、世界の人々の目からはあなたがマヌケのように見えてしまう。ここアメリカであなたが街をうろついていれば、いずれ引き抜かれて外国へ送られることになる、まるでブリキの兵隊のように。そして戦場に着いたなら、いったい何のために戦っているのかと尋ねられ、あなたは返答に窮し、言葉を作り出せない舌は頬の内側をつつくだけだ。冗談じゃない、アンクル・サムを法廷に引っ張り出せ、世界の前に引っ張り出せ。

私に言わせれば、投票権とはすなわち自由のことである。この点について私はロマックスと意見

を異にしているのだが、投票券が金よりも重要だということをあなた方には理解してほしい。それは証明可能なことだろうか？ 答えはイエスだ。国連に目を向けてみよう。国連には貧しい国々も参加しているが、投票において力を合わせれば、豊かな国々の行動を抑止することができる。そういった人々は一つの国を持ち、一つの票を持ち、それは誰にとっても平等な票である。アジア、アフリカ、あるいは地球上の有色人種の住む所からやって来た兄弟たちが集まれば、その票の力によってアンクル・サムに王手をかけることが充分可能だ。投票券がもっとも重要だということがお分かりいただけるだろう。

今この国において、我々は2200万人のアフリカン・アメリカンである。それが我々なのだ、我々はアメリカにいるアフリカ人である。あなたはアフリカ人以外の何者でもない。アフリカ人以外の何者でも。自らを黒人ではなくアフリカ人と呼ぶことで前進することは確かだろう。アフリカ人は責めを負わない。責めを負っているのはあなただけなのだ。アフリカ人は自分たちのために公民権法を制定させる必要などない。アフリカ人は思い立った時に好きなところへ行ける。だからやることといたら髪型を整えることくらいだ。もう黒人であるのはやめよう。フーガガバとでも名乗りたまえ。そうなれば、どれだけ白人が馬鹿か明らかになるだろう。あなたは馬鹿に付き合わされているのだ。頭にターバンを巻いた濃い褐色の肌を持つ友人たちがアトラントのレストランに行って以来、その友人は自らを人種差別から解放された人間だと称している。白人たちが通うレストランに行って、席に座ると、店員が食事を運んでくる。そこで友人は、「ここに黒人が来たらどうする？」と訊いてみた。するとウエイトレスは友人を見返して、「どうして？ ここに来ようなんていう黒人連中はいないけど」と答えたのだ。そこに座っている友人は夜闇のように黒い肌をしているというのに。それは頭にターバンを巻いているおかげらしい。

あなたが相手にしているのは、思い込みと偏見によって正気と知性を日に日に失っている人間だ。連中は恐れを抱いている。周囲を見回し、この地上に存在するものを目にして、時の振り子があなたの方へと振れているのを目にする。今、どこで繰り広げている戦いにおいても、連中は勝利をつかめずにいる。どの戦場においても、我々と同じ肌の色を持つ人間と戦っている。だが連中は黒い肌の人間に打ち負かされている。連中はもはや勝利を手にすることはできない。連中はこの前の戦争には勝ただろう。だが朝鮮戦争では勝利を逃した。勝てなかったのだ。連中は休戦協定に署名をするはめになった。それはつまり敗北である。

アメリカが自らの持てる全兵器を持ち出して戦争をしても、いつも米を食べている人々から引き分けに持ち込まれ、戦いをものにできずにいる。休戦協定に署名をしなければならなかったアメリカは、そんなことになるとは思っていなかっただろう。アメリカの状態は悪化しているが、これ以上は悪くなりようがない。水爆を使用可能であるというひどい状態にあるものの、ロシアもそれを使うかもしれないという恐怖のために結局使えずにいる。ロシアも同じように、アメリカがそれを使うかもしれないという恐怖を抱いている。両方とも兵器を持っていないようなものな

のだ。互いの兵器が互いのそれを無力にしているために、どちらも使用を阻まれている。だから実際に実力行使ができるのは白兵戦だけなのだ。白人はもうこれ以上白兵戦を行っても勝利を手にはすることはできない。白人の栄光の日々は終わってしまった。そのことを黒人は知っている、褐色の肌の人々は知っている、赤い肌をしたネイティブ・アメリカンの人々は知っている、黄色人種の人々は知っている。だから白人と戦う人々は、アメリカが不得手であるゲリラ戦に持ち込むようにする。そしてあなた方にはゲリラ戦士になる度胸があり、白人たちにはそれが無い。そのことをここで申し上げておく。

ごく手短かにゲリラ戦について説明させてほしい。あっさり、あっさり済ましてしまうので傾聴いただきたい。ゲリラ戦士になるというのは、あなたが自分の道を自分で切り開くということで、力を与えてくれることなのだ。今までの戦争ではいつも戦車を使い、人垣を築いて戦っていた。戦闘機が頭上を飛び交い、他にもごちゃごちゃとしたものがあふれていた。しかしゲリラは自分の身ひとつで戦う。ライフルとスニーカー、飯盒一杯のご飯、そして志、それだけがあればいい。太平洋の島々にいた日本人は、アメリカ軍が上陸してきたとき、たった一人でそれを撃退することもあった。日中はただただ日が暮れるのを待ち、いよいよ日が沈むと暗闇によって誰が誰なのか判別ができなくなる。そして彼は短剣を取り出して藪から藪へと滑り込み、一人また一人とアメリカ人を仕留めていった。白人にはそんなことはできない。太平洋で戦う白人は死を恐れるが故に、どいつもこいつも身を震わせ、緊張状態に陥っている。

同じことがフランスにも起こった。フランス領インドシナにおいてだ。もんの数年前まではコメ農家だった人々が団結して、重武装したフランス軍をインドシナから追い出した。もうそんなものは必要ないのだ、近代的な武装形式はもはや機能していない。ゲリラこそが今日の支配者である。ゲリラたちは同じことをアルジェリアでやってのけた。アルジェリア人とは、そもそもベドウィン以外の何者でもなかったのだが、隊列を編成し、丘へと忍びこんだ。そしてド・ゴールと彼の大仰な兵器はそのゲリラを打ち破ることに失敗する。この地上のどこで戦っても、白人はゲリラ戦を制することができないのだ。連中のペースでは追いつけない。ゲリラ戦はアジア、アフリカとラテンアメリカの一部で広がっている。力だけの馬鹿になるがいい、黒人をぞんざいに扱うがいい。いつか黒人が目を覚まし、投票か闘争かという手段を見つけ出すという可能性が、その頭でイメージできないならばの話だが。

そして締めくくりに、最近ニューヨークで設立された法人団体ムスリムモスクについてほんの少しだけ述べておきたい。私とその仲間がイスラム教徒であり、その宗教がイスラム教だということは間違いないが、自分たちの宗教と政治、経済、社会、市民活動をこれ以上混同することはしない。自分たちの宗教は自分たちのモスクのなかにとどめておく。宗教上の勤めを終えれば、イスラム教である私とその仲間たちは政治活動、経済活動、社会活動、市民活動へと関わっていく。誰であれ、どこであれ、いつであれ、悪魔を、政治、経済、社会に巣食う我々の共同体の人々を苦しませる悪魔を祓うために、ありとあらゆる手を尽くしている。

黒人民族主義の哲学とは、黒人が自分たちのコミュニティの政治と政治家について自由にできるということで、ただそれだけのことなのだ。黒人コミュニティにいる黒人は政治の科学を学習し直さなければならない。そうすれば、政治とは見返りを求めてやるものだということが理解できるだろう。投票券を放棄してはならない。票とは弾丸のようなものだ。標的を目にするまでは引き鉄を引くことはないし、標的が射程距離内にいないなら、弾丸はポケットにしまっておかなければならない。

黒人民族主義の哲学はキリスト教の教会で教えられている。全米黒人地位向上協会でも教えられている。人種平等会議で教えられている。学生非暴力調整委員会で教えられている。イスラム教の集会で教えられている。他にもない無神論者と不可知論者が集まった機会に教えられている。それはどこでも教えられていることなのだ。ぐずぐず、こそこそ、へこへこ、自由を獲得するためにそんなやり方をすることに黒人はもはやうんざりしている。今自由になりたいのだ、「勝利を我らに」などと言っているかもしれない、勝利が我らのものになるまで戦わなければならない。

黒人民族主義の経済哲学は純粋で分かりやすい。ただ単に、自分たちのコミュニティの経済活動を自由に行うということだ。なぜ我々のコミュニティにある商店の全てを白人が経営する必要があるのだろうか？ なぜ我々のコミュニティにある銀行の全てを白人が経営する必要があるのだろうか？ なぜ我々のコミュニティにおける経済活動を白人が掌握する必要があるのだろうか？

なぜだ？ 黒人の商店が白人のコミュニティに進出できないというのなら、白人の商店が黒人のコミュニティに当然のように進出していることについて説明を求めるべきだろう。黒人民族主義の哲学は経済面での黒人コミュニティのための再教育プログラムに取り組むことだ。自分たちのコミュニティから金を持ち出して生活の場ではない他のコミュニティで使うとき、自分たちの生活の場であるコミュニティはどんどん貧しくなり、金を使ったコミュニティはどんどん豊かになるということを、我々の仲間たちは目の前に突きつけられなければならないのだ。

なぜ自分たちがいつも貧民窟やスラムに住まなければならないのか疑問に思うだろう。そして、コミュニティの外で金を使うときにそれを失うというだけでなく、コミュニティ内にある我々の商店を全てに、白人が縄を括りつけてしまっているということも気がかりだ。そのことによって、我々がコミュニティ内で金を使っても、日が暮れる頃には経営者がどこか街の向こうへと持って行ってしまふ。彼は我々を万力へと放り込むのだ。あらゆる教会において、あらゆる市民団体において、あらゆる共済組合において、黒人民族主義の経済哲学が示しているのは、今こそ我々の仲間たちが自分たちのコミュニティでの経済活動を自由に行うということの重要性を意識するときだということだ。自分たちの商店を持ち、ビジネスを行い、コミュニティ内で起業することで、仲間の雇用を創出するという状態にまで発展していくのだ。コミュニティ内での経済活動を自由にできるようになれば、ピケを張ったりボイコットをしたり、ダウンタウンで貧乏白人た

ちに仕事を恵んでもらえるように乞う必要などなくなる。

黒人民族主義の社会哲学はただ単に悪魔、悪徳、アルコール依存、薬物中毒、その他コミュニティの道德心を壊すような悪魔を祓うことだ。我々自身もコミュニティの水準を高めよう。コミュニティで標準とされる水準を高いところへ持って行き、社交の輪に満足できるように、また我々を求めていない社交の輪に入れてもらおうと走りまわることがないように、我々の社会を美しいものにしなければならない。黒人民族主義のような福音の拡大において、それは黒人を白人に再進化させようという意図によるものではない。白人のことなどよく分かっているだろう。そうではなくて、黒人を己自身へと再進化させるためのものなのだ。白人の考えを変えようとしてもしょうがない。白人の考え方など変えようもないし、アメリカの道德心に訴えるような全ての物事を変えることもできない。アメリカの良心は崩壊している。もうだいぶ前からの話だ。アングル・サムには良心などない。

連中は道德の何たるかを知らない。自身が悪魔で、違法者で、不道德であるために悪魔を祓おうとはしないのだ。悪魔を祓うとすれば、自分たちの存在を脅かされるときだけだ。だからアングル・サムのように道德心の崩壊した人間に訴えるのは時間の無駄でしかない。良心があれば、何の圧力を感じることもなく物事を正そうとするはずだ。白人の考えを変える必要はない。我々自身の考えを変えよう。連中が我々に対して抱いている考えを変えることはできない。我々は互いについて抱いている考えを変えなければならない。新しい目線で、互いのことを見るのだ。互いを兄弟姉妹のように見るのだ。自分たちでこの問題を解決するのに必要な団結と調和を育むために、暖かい心を持って寄り集まらなければならない。どうすればいいだろうか？ どうすれば怨嗟に囚われないようにできるだろう？ どうすればコミュニティに存在する疑心暗鬼と分裂を避けられるだろう？ これからそれをお話ししようかと思う。

ビリー・グラハムが街にやって来て、彼がキリストの福音と呼ぶものを説いて回っているのを目にしたが、あれはただの白人民族主義だ。彼はそういう人物だ。ビリー・グラハムは白人民族主義者だ。一方の私は黒人民族主義者だ。しかし指導者たちにとってグラハムのような有力者に疑いと羨望をとまなう嫉妬を抱くことは自然な傾向である。いったい彼はどうやって教会の指導者たちの全面的な協力を得ることができているのだろうか？ 教会の指導者たちが羨望や嫉妬を抱かせる弱さを持たないからだと考えてはいけない、誰しもがその弱さを持っている。海の向こうローマにおいて、一人の枢機卿を教皇として選出しようというとき、彼らは密室にこもるので悪態や喧嘩などがあってもそれは聞こえないようになっている。

ビリー・グラハムはキリストの福音を説教するためにやって来る。彼は福音を説くのだ。みんなを扇動して、しかし自分の教会を持つとはしない。もし教会をつくろうとして来たというなら、既存のどの教会の人間も彼と敵対するだろう。彼はただ単にそこに現れ、キリストについて語り、キリストのいるどんな教会にも行くためにキリストの教えを理解するどんな人々にも語り

かけるのだ。こういったやり方であれば、教会は彼に協力をしてくれる。さあ、我々もこのやり方を学ぼう。

我々の福音は黒人民族主義だ。どんな団体の存在も脅かそうとは思わないが、黒人民族主義の福音を説いて回っている。黒人民族主義を説教し実践している教会があればどこであれ、その教会に参加しよう。全米黒人地位向上教会が黒人民族主義の福音について説教し実践しているのなら、全米黒人地位向上協会に参加しよう。人種平等会議が黒人民族主義の福音について説教し実践しているのなら、人種平等会議に参加しよう。黒人の地位向上の福音を持つならどんな団体にも参加しよう。あなたがそこへ入ったとき、こそこそ、へこへこといった態度を目にしたなら、それを引き抜いて取り除いてやろう。それは黒人民族主義ではないからだ。そうすれば、もっと別の可能性が見えてくる。

この方法に従えば、団体はその人数と規模と質を増大させていくだろう。そして8月までに、黒人民族主義の政治、経済、社会の哲学に関心を持つ使節が全国から集まる黒人民族主義集会を開催しよう。その集会を開催した後で、セミナーを開くのだ。議論を交わし、みんなの意見を聴こう。新しいアイデアと新しい解決策と新しい答えを聞かせてもらおう。その上で、そこに黒人民族主義政党を設立する見通しが立つようなら、それを実現しよう。黒人民族主義の軍隊の編成が必要ならば、それを実現しよう。それは投票か闘争かの問題になっていくだろう。それは生か死かの問題になっていくだろう。

もうこの国で座り込みのデモをやめる時が来ている。何人かの貧乏白人上院議員、北部と南部の貧乏白人どもには、ワシントンDCに座り込みのデモをやらせてもらえば良い。そのうち、我々が公民権を手にするべきだという結論に至ることだろう。私に対して私の権利について語る白人など一人もいない。兄弟たちよ、姉妹たちよ、絶対に忘れるな。もし国会議員たちと大統領告示がわざわざ白人への自由を与るように仕向けられていないのなら、立法、告示、最高裁判決が黒人に自由を与える必要などはないはずなのだ。白人に知らしめてやろう。この国が自由の国であるのなら、この国を自由であるがままにさせるのだ。もし自由の国でないのなら、それを変えなければならぬ。

我々は誰とでも、いつでも、どこでも、共に歩むだろう。本当に妥協無く問題に取り組み、敵が暴力を用いない限りこちらにも暴力を用いず、しかし暴力を用いるならこちらにも暴力を用いる、そんな人々と。我々はあなたと共に有権者登録を求める運動を行い、あなたと共に家賃不払い運動を行い、あなたと共に学校をボイコットしよう。私はいかなる種類の人種統合も信じない。それを気にかけてさえいない。どうしたってあなたがそれに納得することはないと分かっているからだ。死を恐れるがゆえにあなたはそれに納得しないだろう。死を覚悟しなければならないのは白人に向かっていこうとする、そして実際に向かっていく時だ。ミシシッピで、ここクリーブランドで、貧乏白人どもがそうであったのと同じくらいの暴力を用いることになる。しかし現段階

では、我々はあなたと共に学校システムにおける人種隔離に反対する学校のボイコットを行っている。人種隔離の学校システムで学べば、子供は心に傷を負った状態で卒業することになる。これはつまり、黒人ばかりだからという理由で学校が人種隔離されているということではない。人種隔離学校とは、その学校がどんなものであれどうでもよいという人々によって支配されているということなのだ。

私が何を言わんとしているか説明させてほしい。隔離された地域またはコミュニティとは、そこに暮らす人々が外部の人間に政治と経済を支配されたコミュニティのことである。隔離コミュニティの白人居住地域のことをそう呼んだりはいしない。黒人居住地域ばかりが隔離コミュニティとされてしまうのだ。なぜか？ 白人は自分たちの学校、銀行、経済、政治、その他全てについて自由に運営していくことができる。だが連中はあなたのもので自分たちの自由にしてしまうのだ。誰かの支配下であれば、それは隔離されているということになる。そこにあるものの中で最低最悪のものしか得られなかったとしても、ただあなたが自分のものを持っているというならば、それは隔離されているということの意味しない。自分のものを自由にできなければならない。白人が自分たちのものをそうしているように、あなたは自分のものを自由にする必要があるので。

人種隔離を無くすためには、何か最善の方法かご存知だろうか？ 白人は統合よりも分離を恐れている。隔離はあなたを白人から引き離すことを意味するが、しかしそれは白人の司法権の範疇から出るのに十分な距離ではない。それに対して、分離とはあなたが完全に離れてしまうということの意味する。だから白人は黒人が分離してしまうままとさせるのではなく、先手を打って統合させようとするのだ。だから我々はあなたと共に、人種隔離学校システムに反対しよう。それは犯罪であり、想像しうるどんなやり方においても、欠陥のある教育に晒された子供たちの心を完全に破壊してしまうようなものなのだ。

最後になったが、ライフルとショットガンについての大論争についてひとっておかなければならない。政府が黒人の生命と財産を守る気も、その能力もないと露呈した地域では、すぐに黒人が自らを守るようにすべきだということだけ、私はすでに述べておいた。憲法改正案の第2条において、あなたも私もライフルやショットガンを持つ権利を与えられている。これはライフルを手に入れて軍団を組織し白人を狩りに行けという意味ではなく、あなたは権利を持った状態にあるということなのだ。つまり、あなたの行為は正当化される。それが違法ならば我々は違法なことは何もしない。もし白人が黒人にライフルやショットガンを買うなど言うならば、そのときは政府にやるべきことをやってもらうとしよう。

言いたかったのはそういうことだ。寄ってくる白人にマルコムのことについてどう思うかなどと訊かれてもまともに取り合うことはない。年老いたアンクル・サムは「君が『アーメン』と言おうとしているかどうか私が考えていると思うかい」などとあなたに尋ねたりしない。そうで

はなくて、彼はあなたの中から黒人奴隷「トム」を見出そうとするのだ。ライフル・クラブのようなものを組織して、外へ標的を捜しに行けと言っているのではない。あなたが人間であるならば、1964年という今この年に、白人たちに分からせてやるべきなのだ。アメリカが政府を運営する上で求められる仕事を遂行せず、何十億ドルもの金を防衛費につぎ込んでいるにも関わらず我々が払っている税金に見合う保護を与えないのなら、我々が一発の弾丸に12ドルか15ドルかそこらの金を使うということを受け入れるのにやぶさかではないはずだ。外へ出て誰かを撃ち殺そうなどと考えるはいけない。だが、我々が足を運び書に親しむ教会を連中が爆撃したとき、また兄弟姉妹、とりわけここにいる誰か、何人かは議会からの荣誉賞としてもらったメダルをぶら下げているようだが、このくらいの肩幅で、このくらいの胸囲で、このくらいの筋肉をつけている誰かに対して冷酷な殺戮が行われたとしよう、それが成人ではなく、白人が祈れと教えたその神に祈っていた四人の幼い女の子に対して行われたとしよう。我々がそのとき目の当たりにするのは、そこにやって来た政府が犯人を見つけられないという光景だけなのだ。

なぜアメリカはアルゼンチンのどこかに潜伏していたアイヒマンを発見できたのだろうか。南ベトナムで2、3人の米軍兵士を使って誰かにちょっかいを出させて、その反撃によって兵士たちが殺されるように仕向けてから、アメリカは戦艦を送り込み、南ベトナムに干渉を始めた。また、キューバにも軍隊を送り込み、自分たちが自由選挙と呼ぶやり方を押し付けた。この年老いた貧乏白人どもこそが、自国で自由選挙を行っていないというのに。

あなた方が二度と私の姿を見られないようなことが起きたとき、つまり朝起きたら私が殺されるといったようなことが起きたとき、私は一つの言葉を残して死ぬだろう。「投票か闘争か、投票か闘争か」

1964年の黒人がふらふらとして何人かの貧乏白人上院議員たちが、黒人の権利について話が及んだ時に議事妨害を行うのをぼんやり眺めているようなことがあれば、我々はその恥ずかしさに顔を背けて伏せてしまうだろう。1963年のワシントン大行進というかつてなかった出来事について我々は語り合う。1964年にはさらなる出来事があってしかるべきだ。

そして今回、黒人は去年と同じようなやり方はしない。「勝利を我らに」などと歌いはしない。白人のお友達と馴れ合ったりしない。以前と同じメッセージを書いたプラカードを使いまわしたりしない。往復切符を持った人間のように同じ所をグルグル回ったりしない。手にしているのは前進するための片道切符だ。もし白人たちが非暴力の軍隊に押しかけられたくないと思うのなら、お仲間に議事妨害を止めるよう伝えればいい。

黒人民族主義は一刻の猶予も許さない。大統領であるリンドン・ベインズ・ジョンソンは民主党の長でもある。彼が公民権を支持しているというなら、来週にでも上院議会にってもらいその所信を表明してもらおう。いや、今すぐにでもそうしてもらいたい。そして南部のお仲間の批判

もしてもらおう。今すぐに、道徳的な姿勢を見せてもらわなければ。今すぐだ、猶予は許されない。選挙まで待とうなどと考えるなと彼に伝えよう。我が兄弟姉妹たちよ、彼が煮え切らない態度を取り続けるならば、この国にはある条件が整うようになるだろう。その条件とはアメリカに生まれる特殊な気候のことで、その気候は撒かれた種を地表から目覚めさせ、その頂に今まで誰も夢にも見なかったような花を咲かせるのだ。1964年、その花は「投票か闘争か」という形を取っている。

聴衆の皆様、ご静聴ありがとうございました。